

ことばの相談室を利用した言語発達障害児の実態

白井 結^a 林 耕司^a 富井 浩子^a

^a長野医療衛生専門学校 言語聴覚士学科

The actual condition of children with language developmental disorders using the language consultation room

Yui Shirai^a Kouji Hayashi^a Hiroko Tomii^a

^aNagano Medical Hygiene College

要旨：長野医療衛生専門学校附属「ことばの相談室」は2021年10月に開設し2年が経過した。そこで過去1年間に当相談室を利用した児の実態を調べた。対象は、2021年12月から2022年12月現在までの1年1カ月間に新規相談を行った28名である。その実態は、男児24名、女児4名。年齢は2～11歳であった。居住地は上田市13名、15名が上田市外であった。診断名は、診断無しが9名と最も多く次いで自閉症スペクトラム障害と知的障害の合併が7名であった。相談内容としては「ことばの遅れ」を主訴に来室する方が19名と最も多かった。今回の調査で相談者の実態を把握することができた。現在は学生が臨床技能を習得する実習の場としても利用している。今後は、相談室の存在が地域に浸透し、困り感を抱えている方たちがスムーズに相談、支援を受けられる場所にしていくことを目指していきたい。

キーワード：ことばの相談室、発達障害、相談支援、言語聴覚士、専門学校

1. はじめに

長野県上田市にある長野医療衛生専門学校附属「ことばの相談室」（以下、相談室）は2021年10月で開設より2年が経過した。設立当初からのねらいである「言語発達障害児とその保護者の支援を行うことで地域に貢献すること」「学生が臨床に参加し、臨床技能を習得すること」の2点を基に相談を行ってきた。相談室では週3日、1日につき2名の児の相談に当たっている。担当言語聴覚士

は3名である。

相談室を開設し2年が経過したため、利用した児の実態を把握することを目的として調査を実施した。その結果をまとめ報告する。

2. 調査方法

(1) 対象

対象児は2021年12月から2022年12月現在までの1年1カ月間に新規相談を行った28名であ

^a長野医療衛生専門学校
〒386-0012 長野県上田市中央2-13-27
info@nagano-iryousei.ac.jp

る。

(2) 調査内容

児の性別、居住地、診断名、年齢、相談内容について初診時カルテ（当相談室独自のもの）を基にまとめ報告する。

3. 結果

(1) 性別

28名中男児24名、女児4名であった。

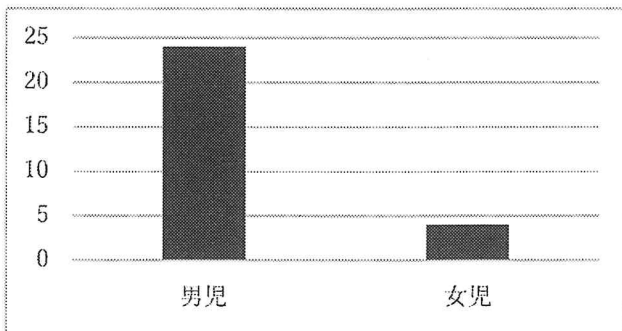


図1 性別内訳

(2) 居住地

居住地は長野市6名、千曲市2名、上田市13名、小県郡青木村1名、小諸市1名、佐久市2名、松本市3名。

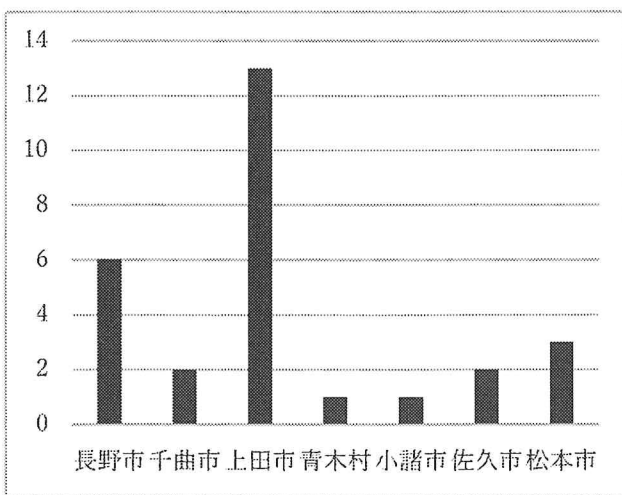


図2 居住地内訳

(3) 診断名

自閉症スペクトラム障害（以下、ASD と略す）5名、知的障害（以下、ID と略す）2名、ASD+ID7

名、診断名無し9名、その他5名〔（注意欠陥多動性障害（以下、ADHD と略す）1名、ダウン症候群1名、場面緘黙1名、機能性構音障害1名、ASD+ADHD1名）〕であった。

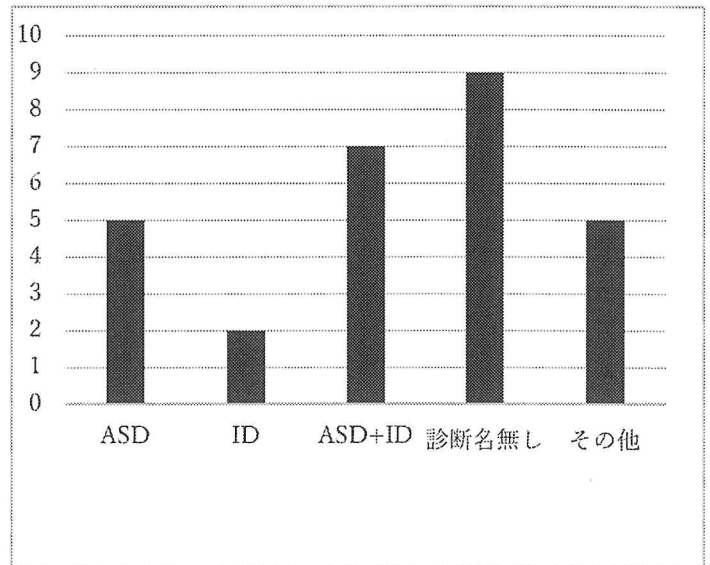


図3 診断名内訳

(4) 年齢

2歳4名、3歳5名、4歳3名、5歳4名、6歳5名、7歳5名、8歳1名、11歳1名。

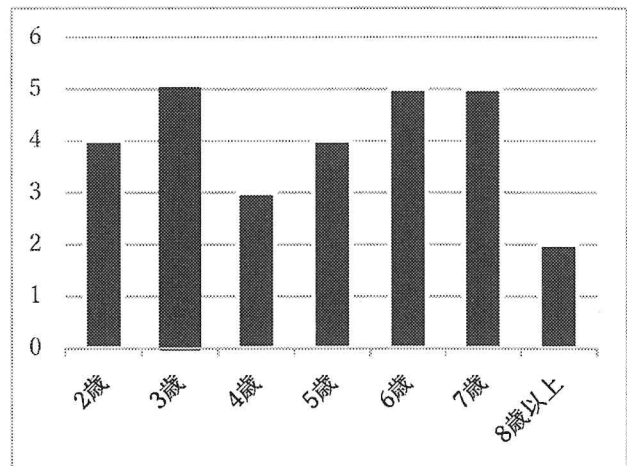
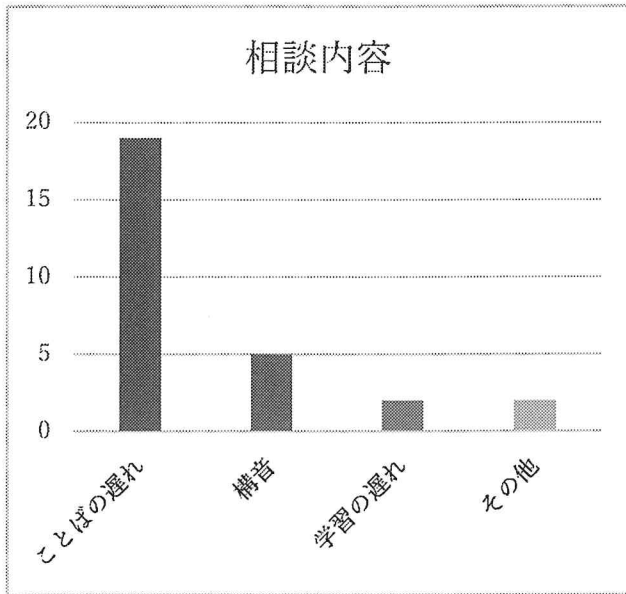


図4 年齢内訳

(5) 相談内容

「ことばの遅れ」19名、「構音」5名、「学習の遅れ」2名、「その他」2名（場面緘黙、コミュニケーション）であった。



4. まとめ

1, 相談室利用児の実態

調査結果をまとめると、性別は男児 24 名、女児 4 名。年齢は 2 歳 4 名、3 歳 5 名、4 歳 3 名、5 歳 4 名、6 歳 5 名、7 歳 5 名、8 歳 1 名、11 歳 1 名。居住地は上田市 13 名、15 名が上田市外居住（長野市 6 名、千曲市 2 名、小県郡青木村 1 名、小諸市 1 名、佐久市 2 名、松本市 3 名）。診断名については、診断無しが 9 名と最も多く、次いで ASD と ID の合併が 7 名、ASD 5 名、ID 2 名、その他が各 1 名ずつであった（ADHD、ダウン症候群、場面緘黙症、機能性構音障害、ASD+ADHD）。相談内容としては「ことばの遅れ」を主訴に来室する方が 19 名と最も多く、次いで「構音に関する相談」が 5 名、「学習の遅れ」2 名、「その他」2 名（場面緘黙、コミュニケーション）であった。

2, 学生への効果

1 年生は授業内で相談室での訓練の録画映像を視聴し、クラス内で相談児のコミュニケーション像について検討しあった。2 年生は臨床実習指導の一環として、訓練場面を実際に見学し、実習日誌へ観察事項と考察を記載した。その日誌を用いて学生へフィードバックを行った。そして、3 年生は実際に実習という形で対象児と関わりをもった。

学習した内容が、実際に訓練場面を見学することにより具体的且つ身近なものとして学んだ知識を定着することができていた。

3, 教務間での情報共有

1 人の児に対し複数の教務が相談に当たることによってその児に合ったアプローチが可能となった。週に 1 回、相談室担当教務間で小児に関する勉強会を実施した。最新の研究誌からの新しい知識や、事例検討などを行うことで学びへとつながった。

5. 今後の課題

今回の調査で相談者の実態を把握することができた。今後は、相談室を利用する方が増え、少しでも地域の社会資源となりことばに困り感を抱えている方たちにとってスムーズに相談、支援を受けられる場所にしていくことを目指していきたい。そして、相談室を通して学生が小児臨床に関心を持ち、小児領域で活躍したいと希望する学生が増えていくことを望みつつ、学生の実習に繋げていきたい。

倫理的配慮：保護者には本報告について口頭で説明し同意を得た。

本実践報告に申告すべき利益相反はない。

受理日：2022年3月23日

